

NPO 法人 純正律音楽研究会会報 ～2022年5月発行～

ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291
Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

発行日 2022年5月10日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集 相坂政夫

No.72



風薫る清々しい季節となりましたが、会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。玉木宏樹が天国に行ってから丸10年になりました。昨年のコンサートは、中止が2回、開催できたのは3回でした。今年も3月のコンサートは中止になってしまいましたが、5月は開催の予定です。

今年のコンサートスケジュール

●5月21日(土曜日)「純正律音楽コンサート」横浜市磯子区民センター「杉田劇場」

出演：水野佐知香(ヴァイオリン)、三宅美子(ハープ)、杉本伸陽(ビオラ)
植草ひろみ(チェロ)、荒井章乃(ヴァイオリン)

●9月3日(土曜日)「癒しの音楽コンサート」山崎製パン総合クリエーションセンター飯島藤十郎社主記念「LLCホール」

出演：水野佐知香(ヴァイオリン)、三宅美子(ハープ)、吉原佐知子(箏)
崎元譲(ハーモニカ)

●12月25日(日曜日)「クリスマスコンサート 2022」横浜市磯子区民センター「杉田劇場」になります。

ご多忙中とは存じますが、ご来場いただければ幸いです。

今後とも純正律音楽研究会をよろしくお願い申し上げます。

コロナ禍のコンサート

洗足学園音楽大学客員教授・ヴァイオリニスト
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香

暑い日、涼しい日、温暖化で気候変動が多いこの頃ですが、皆様お元気でいらっしゃいますか？

コロナ禍になり3年が過ぎ、この間にたくさんの方がいました。以前も書きましたが、大学での授業のあり方もそうですが、社会のルールなども変わって来ています。授業や会議などでも、対面とWEBを組み合わせたたり、以前では考えられなかったことです。

コンサートなども通常に戻りつつ、N響の演奏会などは常に満席、海外からもアーティストが来日し、普段の状態が戻ってきています。その中で、また、緊急事態宣言が出た時の対応の準備もしつつ、もう慣れてしまった世の中にびっくりしています。

最近、若い演奏家が、社会貢献などを考えピアニストの反田さんもそうですが、会社を立ち上げたり、子供たちとのコラボのコンサートなどをしながらコンサート活動を組み立てる人たちも増えてきています。

世の中でも、高校生、大学生、中学生までも、起業をして勉強をしながら仕事もしている！ 凄いですよね！若い人たちのエネルギーを少しでももらい、少しでも新しいことを組み立てていければと思うこの頃です。

先日、新しい話を聞きました。

水素で走る車を世界中で開発中と聞きますが、日本では、車にお水を入れるだけで水素を作り走れる車が近いうちに発売されるとか？ある鉱物にお水を注ぐだけで水素が発生し、あらゆるものに電気として使われることが決まっているようです。世界中から注目されていて、たくさんの方々と契約をし、先日行われた東京オリンピックの選手が過ごしていた街もこの水素発電の電気だったそうです。その開発者の方は、この研究で、2回水素が爆発してあの世に行きそうになったそうです。発想の転換にビックリして、お水で車？と、早くその時代が到来しないか待ち侘びています。

純正律音楽研究会も玉木氏が昇天されて10年が経ち、楽譜、CDなど、ハーブの三宅美子さんを中心に作曲家の矢澤弘章さんが毎週事務所に通い、茶箱などに入っている資料などの整理をしてくれています。CDに残されているけど、楽譜が見つからない！逆に楽譜はあるけど資料として必要なCDがなかったり、とても苦労されていますが、新しい形での演奏、楽譜、資料の残し方など考えていかなくてはと思っています。

今回の5月21日の横浜にある杉田劇場でのコンサートでは、そこからピックアップをして、当時玉木さんと一緒に演奏されたことがある今回はヴィオラをお願いしましたがヴァイオリンの杉本伸陽さん、チェロの植草ひろみさんをゲストに当時のお話などを交えながら、ハーブの三宅美子さん、ヴァイオリンの荒井章乃さんと、弦楽四重奏とハーブでコンサートいたします。

玉木さんは教育テレビなどでも弦楽四重奏で楽しい曲を演奏されていたり、あらゆる曲を編曲されています。チゴイネルワイゼン、子犬のワルツ、猫ふん

じゃったなど、きっと楽しいコンサートになると思います。リハーサルを控えワクワクしています。杉田劇場は、駅直結のホールになります。ぜひ皆様にお越しただけたら幸いです。玉木さんの世界にどっぷり浸かってお楽しみいただけたらと思います。

コロナ、ウクライナでの戦争など、世の中には不可解な出来事がとても多いこの頃なのでは？と感じています。

世界の人たちがいつもニコニコして、気持ちよく元気でいられる世の中になってほしい。美しいハーモニーは世界を救う！玉木さんの願いが叶うように、私たちも行動していけたらと思います。

ワクワク、ニコニコをスローガンに毎日を過ごしたいと思います。

「笑う門には福来たる！」

ムッシュ黒木の純正律講座 第71時限目

平均律普及の思想的背景について(60)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

ウクライナで戦争が始まってしまった。というわけで、急遽予定を変更して、宗教の観点からこの戦争の問題点を解説してみたい。

ロシアを理解するためには正教の教えを知る必要があるだろう。ここで今話題の漫画『ゴールデンカムイ』を取り上げたい。アニメにもなっている上に、近頃実写化も決まり、4月28日にはめでたく完結を迎えた、北海道のアイヌ文化をテーマにした作品である。

この中で、ロシア正教会が登場する。主人公の少女の父親はポーランドの血が入った樺太アイヌで、ロシアの革命家と手を組みロシア皇帝アレクサンドル2世を爆弾テロで殺害することに成功した後、北海道に逃げ渡り家庭を作って主人公を生む、というのが最初の設定だ。その父がアイヌのために残そうとした金塊を巡る冒険譚である。もちろん漫画の登場人物は架空のものであるが、アレクサンドル2世殺害自体は史実だ。

『ゴールデンカムイ』第177話においては、ロシアの革命家たちが近代化のために農村に入り農民を啓蒙しようとするが、上流階級出身の彼らと庶民の価値観の違いに行き詰まったと語るシーンが描かれている。正教への信仰は人々の生活に深く浸透しており、「神の代理人」である皇帝を崇拝しているので社会変革運動に興味を持たないのだと革命家たちは考えた。対して第178話では、正教会の信仰がアイヌたちのカーム＝神々への信仰を侵食してしまうのではないかと危惧するアイヌの姿が描写されている。ロシアの革命家たちはロシアの近代化と革命の遂行のために、アイヌたちは自分たちの神々＝カムイを正教から守るために手を組み、爆弾テロを実行したのだ。

西方キリスト教圏の歴史では、教皇と皇帝という二つの政治的勢力がライバルとして競い合ってきた。対して、東方教会は、政治は皇帝そして宗教は総主教が担当し、この両者が助け合って社会を治めていくスタイルを取る。これをビザンチンハーモニーという。西方社会では、教皇と皇帝の政治権力をめぐる縄張り争いによって、この両者の間の教会が意識されるようになり、それが政教分離の原則の土台となった。政教分離が人権と共に西洋民主主義の条件の

一つであることは改めて指摘するには及ばないだろう。一方、正教の世界は基本的に政教一致である。表向きは皇帝と総主教が手を取り合って社会を治めるとしつつも、実質的には皇帝が「神の代理人」として神の威光を背負って絶大なる権力で統治し、総主教はそれを背後で支えるという構造を持つ。今やプーチンは皇帝として振る舞い、ロシア正教会のキリル総主教を従えている。

そのプーチンが現在ロシア国民の絶大なる支持を受けていることは決して不思議ではない。プーチンは「神の代理人」として、ロシア正教に基づく自分たちの文化を西方キリスト教文化から防衛しようと奮迅する英雄を演じているのだ。この西方キリスト教文化には、当然、欧米が誇る西洋型の民主主義、つまり人権や政教分離などの文化も含まれる。例えば、2022年3月12日付CNNの記事は、「ロシア正教会トップのキリル総主教は、性的少数者らが性の多様性を訴えるプライドパレードが『ウクライナの戦争』の原因の一つになったとの認識を示した」と伝えている。西方キリスト教会の教義でも同性愛はタブーだが、この発展を促進した人権思想は明らかに、人権は神が人間に与えた権利と考える西方キリスト教会の文化に基づいている。ロシア正教徒にとって人権や政教分離の原則に基づく西洋近代民主主義とは自分たちの文化を汚す悪しき外来文化に他ならず、「神の代理人」たる指導者プーチンは自分たちの文化を守ろうとする英雄なのである。

政教分離という西洋民主主義の原則に対して政教一致の立場を取るイスラーム教徒の多くが激しい拒絶反応を示していることは広く知られていることだろう。それと同様、正教の信仰が深く根を下ろしているロシアも政教分離を受け入れようとしない。その拒絶の中心には「神の代理人」である大統領プーチンが玉座について君臨している。そう考えていくと、今回の件の宗教戦争の色彩がわかるだろう。

なお、和人とアイヌが協力してアイヌ文化を後世に伝えることになったという『ゴールデンカムイ』結末における大円団とは違い、実際アイヌ文化を侵食したのは正教会ではなく日本人であったことを言い添えておく。

贋作三人衆他、その1

純正律音楽研究会 初代代表
玉木宏樹遺作

ベートヴェン以降、ロマン派に到り、音楽出版業も規模が拡大し、作曲家も段々著作権意識が芽生えてくるにつれ、ハイドン時代のような贋作がはびこる根拠がなくなり、間尺に合わない贋作造りは影をひそめました。しかし時は経ち、20世紀を少し過ぎた頃に、金儲けとは目的の全く異なる贋作が相次ぎました。その贋作者たちのモチベーション(動機づけ)は一体なんだったのでしょうか？

その話に移る前に、ガラッと世界を変え、美術界を根底からゆるがした世紀の贋作事件を見てみましょう。それはオランダの国宝画家たるフェルメールの贋作に命をかけた、ハン・ファン・メーヘレン事件です。私はTVの「お宝鑑定

団」の大ファンで、「何て、下手な贋作でしょう」という判定に笑い転がっています。しかし、美術品の贋作問題については全くといっていいほど知識はありませんが、このメーヘレン(1889～1947)には興味があり、多少調べました。

最近日本でも話題を呼んだヨハネス・フェルメール(1632～1675)はオランダの国宝級画家ですが、再評価されたのが遅かったせいか真作といえる作品は40近く位しかありません。当時のオランダ美術界の大重鎮でフェルメールの権威だったブレディウス博士は、失われたのか未発見なのか、中期のフェルメール作品の発見を預言していたおりに、さる資産家の貴婦人を名乗り、代理人を通じて、フェルメールらしい作品の真贋を判定してほしいとしてブレディウス博士の所に持ちこまれたのが「エマオの食事」と題された作品で、博士のあらゆる鑑定法、最後にはX線検査まですり抜け、待ち望んでいた中期の大傑作であると博士に判定され、絶賛された「エマオの食事」が実はメーヘレンの執念による贋作であったことが後に判明するのです。

メーヘレンは天才的な技能を持つ画家で、学生時代、コンクールで優勝し、将来を期待されましたが、彼のあまりにも完璧な職人芸による作品は、当時、モンドリアンのモダニズムが流行りだした風潮の中で、「ただのコンサバ(保守)的職人芸」とズタズタにこきおろされ、絶望の淵に立たされました。ここで彼は自分の世界観を変えるか、職を変えるかすればよかったのに、彼は何と自分の将来をズタズタにした、ブレディウスを頂点にした、オランダ美術界の欺瞞あふれる虚飾に満ちた腐敗に対して復習の鬼となって、フェルメールの贋作造りに天才性をつぎこんだのです。そして誰にも贋作だと見抜けない技法と、それだけではなく、フェルメールの時代鑑定にも耐えられるように、当時の三流作品のキャンパスの上にフェルメールが使った画材等で、フェルメールタッチで完璧な贋作を完成させ、まんまとブレディウスを騙して復讐をなしとげたのです。

私は作曲家でもありますので、音楽におきかえてみるとよく理解できます。丁度メーヘレンが学生だったころ、音楽の世界は、シェーンベルクによる調性の世界の破壊によって、無機的で難解な、つまり、メロディもハーモニーもない世界に突入していたのです。そういう時代に、コンクールで優勝した若者による調性を知りつくした職人芸的作品を、コンサバと斬り倒すのは単に時代に流されているだけの無能な集団にとっては、一番簡単なことだったでしょう。ここでズタズタにされた若者が、復讐にめざめ、絶対に贋作を見破られないように天才性を発揮して、バッハの贋作を造り、音楽史に一大事件をひき起こすというような(無論、こんな事件はありません。・・・いや実はあるのかも知れない、ひょっとしたら・・・)架空話と同じになります。

ところで、すばらしく精巧に造られたメーヘレンの贋作がバレてしまったのはどういうキッカケがあったのでしょうか。それは、第二次大戦の終了後、ナチスの崩壊により、国際的な美術品を秘匿していた、岩塩の洞窟の中から、フェルメールの名画三点が発見され大騒ぎとなりました。その中の「キリストと悔恨の女」はフェルメールの中期の傑作とされており、それをナチスの元帥ゲーリングに売り渡した国家犯罪人の捜査の中で、メーヘレンがゲーリングに売り渡した書類が出てきたため、彼は売国奴として逮捕されたのです。その裁判中にメーヘレンは、犯罪を大否定し、あの作品は自分が描いたものだと言主張し、その贋作の作り方のノウハウのすべてを述べ、それでも信用しない人たちの前

で「じゃあ」といって「キリストと悔恨の女」を描いてみせ、みんなを仰天させたのです。そして彼はあのブレディウスが絶賛した「エマオの食事」も自分の作だと主張しましたが、そこまでは信用されませんでした。しかし彼は獄中で「エマオの食事」をもう 1 枚完成させて、真実を天下のもとにさらしたのです。

この「エマオの食事」は今でも破損されず、オランダの美術館に展示されているそうです。

CD レビュー 純正茶寮

『エドゥアール・シラス』(2012)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興



『BRISA CON TRES AROMAS / ブリサ・コン・トレス・アロマス』(2012)

MARIANA BARAJ & ANNA SATO & IRMA OSNO

マリアナ・バラフ & 里アンナ & イルマ・オスノ

レーベル : ビーンズ・レコード

アルゼンチンのマリアナ・バラフ、奄美の里アンナとペルーのアヤクーチョ出身で日本在住のイルマ・オスノという女性アーティスト3人がコロナ禍という状況の下、リモートで録音した作品である。

正直言うと私自身、フォークロアとしてのラテン（南米）音楽にあまり惹かれない。確かに南米の土着音楽を基にしてはいるのだろうが、西洋からもたらされた和声音楽の枠内に収められた感じがしてしまうのだ。西洋人が流入した時、当時の彼らの和声音楽理論に合わせて土着音楽をアレンジしたのだろうと思う。だからどうしてもフォークロアというより西洋音楽の一変種に聞こえてしまう。それに対して、ヨーロッパのフォークロアには和声理論の枠を飛び抜けた土着性を感じさせるものが多く、個人的にはヨーロッパのフォークロアに惹かれるのだ。

ところが、イルマ・オスノ氏の歌声からは土着性が強く感じられ、一度聞くとや否やすっかり魅了されてしまった。

イルマ・オスノ氏とは秩父在住のギタリスト笹久保伸氏の紹介で知り合った。彼女は笹久保氏に誘われて秩父に住み着いてしまったという。ペルーのアヤクーチョとはかのセンデロルミノソの本拠地で、元来反骨精神が強い土地柄らしい。幼い頃、イルマ・オスノ氏はスペイン語ではなく現地の言葉で暮らしていたとのこと、この作品ではそのアヤクーチョの言葉の歌が聞ける。スペインからの独立心を保つかのように、彼女の歌からは西洋和声音楽には収まらないアヤクーチョの文化の営みが聞こえる。これこそが私の聞きたいフォークロアだと、そう感じる。

モードによる楽曲がメインだが、ところどころ対位法によるハモリが聞けるのは現代風にアレンジしているが故のことであることを言い添えておく。

李氏朝鮮 500 年

NPO 法人 純正律音楽研究会
正会員 弁護士 齋藤昌男

目次

緒言

- 第1. 朝鮮国（1393年～1897年）
 1. 派閥抗争の概要
 2. 第1代国王 李成桂（イ・ソング）
 3. 王子の乱
 4. 士禍（しか）
 5. 朋党政治
 6. 秀吉による朝鮮侵攻
 7. 第15代国王 光海君（クアンヘグン）
 8. 清への服属
 9. 丙子の乱（1636年）
10. 礼論に関する対立
11. 肅宗による換局政治
12. 英社（ヨンジョ）による蕩平策
13. キリスト教カトリックの伝来と弾圧
14. 金祖淳（キムチョスン）、安東金（アンドンキム）氏の勢道政治
15. 興宣大院君（フンソンデウオングン）
政権の成立
16. 閔妃一派によるクーデター
17. 江華島事件（1875年）
18. 壬午軍乱（じんごぐんらん）
（1882年）
19. 甲申政変（こうしんせいへん）
（1884年）
20. 巨文島（コサイとう）事件
（1885年）

- 2 1. 東学党の乱（1894年）
- 2 2. 甲午改革（こうごかいかく）
（1894年）
- 2 3. 日清戦争（1894年～95年）
- 2 4. 閔妃虐殺事件（1895年）
- 2 5. 朝鮮の清からの独立（1895年）
- 2 6. 第26代高宗のロシア領事館への退避
- 第2. 大韓帝国（1897年～1910年）
 - 1. 大韓帝国の成立
 - 2. 日露戦争（1904年）
 - 3. 日韓協約
 - 4. 韓国統監府の設置（1902年）
 - 5. ハーグ密使事件（1907年）
 - 6. 伊藤博文に対する暗殺
 - 7. 韓国併合
- 参考文献

緒言

一番近くにありながら、一番分からない国は大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国です。大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国を理解するには、李氏朝鮮500年の歴史を理解する必要があると、書いてあった本がありました。そこで今回は、李氏朝鮮500年の歴史を振り返ってみたいと思います。

なお、本文中、片仮名の部分は朝鮮語読みを表わし、平仮名の部分は日本語読みを表わします。また参考文献は巻末にまとめて書きます。

第1. 朝鮮国（1393年－1897年）

1. 派閥抗争の概要

李氏朝鮮は成立（1393年）から併合（1910年）まで、政治的な派閥抗争が絶えませんでした。まず概要を見てゆきます。

- (1) 李成桂に貢献したとされた勲旧派は、厳格に朱子学を重んじる士林派を4度も大弾圧しました。
 - (2) 1567年の14代国王宣祖の即位とともに、逆に士林派が勲旧派を駆逐し、以降の朝鮮の官僚派は士林派で占められました。
 - (3) ポストを独占していた士林派は、1575年に東人派と西人派に分裂しました。
 - (4) 1591年に西人派が失脚すると東人派は北人派と南人派に分裂しました。
 - (5) 1606年に北人派も大北人派と小党人派に分裂しました。
 - (6) 大北人派も骨北、肉北、中北の3つの派閥に分かれました。
 - (7) 1623年3月13日、第16代仁祖のクーデターにより大北派が肅清されました。
 - (8) これ以後は、また南人派と西人派間で政争が行われることになりました。
 - (9) 1680年、西人派も老論派と少論派に分裂しました。
- ### 2. 第1代国王、李成桂（イ・ソング）

(在任1332～98年)

李成桂の一族は、高麗時代から咸鏡道で活躍、彼は軍事能力にすぐれていたため、高麗政府の中枢に入りました。1388年、満州を占領した明軍を攻撃する指揮官となり、遼陽遠征の途上、鴨緑江下流の威比島から全軍を引き返し(威比島回軍)、首都開城に入城して辛禡王と崔瑩を追放し、辛昌士を擁立しました。さらに翌年、恭讓王を擁立して、彼は政治・軍事の最高権力を掌握しました。

李成桂は、王権の後ろ盾を確保するために、明に使者を派遣して即位の承認と国号の選定を要請しました。李成桂は朝鮮と和寧の2つを候補として明に打診しました。翌年、明の太祖洪武帝は国号を「朝鮮」と決めましたが、即位を認める金印と誥命を送らなかったため、李成桂は対外的には「朝鮮国王」と自称することが出来ませんでした。

1394年、首都を高麗王朝の本拠地開城から漢陽(漢城、現在のソウル)に移しました。また儒教を国教に決めました。

3. 王子の乱

李成桂は新王朝の基盤を固めるために、八男・李芳碩を跡継ぎにしようと考えていました。しかし、他の王子達はそれを不満とし、王子同士の殺し合いにまで発展しました。1398年に起きた第一次王子の乱では七男・李芳蕃ばかりでなく、跡継ぎ候補であった八男・李芳碩が、五男・李芳達により殺害されました。病床にあった李成桂は、次男・李芳果に地位を譲位し、次男・李芳果が第2代定宗となりました。しかし、第2代定宗は、五男・李芳達の傀儡に過ぎず、1400年には四男・李芳幹により第2次王子の乱が引き起されました。即ち、四男・李芳幹が私兵を率いて、五男・李芳達と争う事態になり、敗れた李芳幹は追放されました。

第2代定宗は位を5男・李芳達(第3代太宗、在位1400年～1418年)に譲り、自らは上王となりました。一方太上王となった太祖(李成桂)は、太宗が即位するにいたる経過に絶望し、その後は仏教に帰依しました。しかし、崇儒廢仏政策を取っていた王朝は一時混乱し、崇儒廢仏は一時中断され、崇儒廢仏政策が本格的になるのは、李成桂の亡くなった後の第4代世宗の時代からです。

4. 士禍(しか)

朝鮮王朝中期に勲旧派(中央貴族=即成官僚)が士林派(在地両班層=新進官僚)に対し、4回にわたって行った大弾圧の事を士禍と言います。

(1) 1498年戊午(ぼご)の年、戊午士禍

第9代成宗は勲旧派を牽制するために士林派を登用しましたが、成宗が死んで燕山君(ヨンサンゲン、第10代、在位1608年-23年)が即位すると、先代成宗の「成宗実録」の草稿に難癖を付け、士林派に死刑、流刑、罷免の大弾圧を加えました。

(2) 1504年(甲子の年)、甲子士禍

燕山君の生母尹代は、かつて王妃でありましたが、廢され、死刑に処せられました。燕山君は、生母の廢位、処刑に関係した勲旧派およびこれに賛成した士林派48名を死刑に処するという弾圧を加えました。

(3) 1519年(己卯<きほう>)の年、(己卯士禍)

1506年、燕山君が追放され、中宗が即位しましたが、中宗は趙光祖

ら士林派を重用しました。趙光祖らは土地兼併に反対して限田制を主張するなど、大土地所有者であった勲旧派への批判、鬭争を推進したため、勲旧派の反感を買いました。1519年、勲旧派は「明党をつくり政治を混乱させた」として、趙光祖ら75名の士林派を死刑、流刑、罷免するという弾圧を加えました。

(4) 1545年(乙巳〈いつし〉の年)、(乙巳土禍)

中宗末年に王位継承をめぐって、中宗第1継妃の世子(のちの仁宗)らの舅(尹任)らと、中宗第2継妃(のちの明宗の生母)の弟(尹元衡)らの対立があり、1545年、明宗擁立派の尹元衡らは、反対派の尹任およびこれと結んだ士林派などの47名を殺害、あるいは流刑にするという弾圧を加えました。

以上4回の土禍の背景には、中央権力に寄生した大土地所有者(勲旧派)と地方の中小地主層(士林派)の対立があります。

士林派は1565年、明宗の生母の死を契機に尹元衡らを追放し、士林派政権を確立しました。

5. 朋党政治

1567年宣祖(ソンジョ、朝鮮王朝の14代の王、在位1567~1608年)の即位により、士林勢力が最終的に勝利を収め、士林派が中心となって政治を行う時代が始まりました。しかし、士林派は、1575年に東人と西人と呼ばれる2つの勢力に分裂し、主導権争いを続けるようになりました。この時代に見られる派閥に別れて、論争を繰り広げる政治体制を朋党政治と呼ばれます。

東西に別れた士林派は互いを牽制していましたが、「東方の聖人」と称される儒者李栗谷(イユルコク)(1536-84年)が存命中は大きな動きはなく、1584年に李栗谷が亡くなると、両党派とも政治の主導権を取るために積極的に動き出しました。当初は東人有利で朝廷をほとんど掌握しかけたところで、鄭汝立(チョンヨリツ)の謀反事件が起こり、西人が東人を粛清し(己丑獄事)、西人が主導権を握るようになりました。しかし、1591年に世子冊立の問題で西人が失脚すると、東人が西人の肅正を行い、以後仁祖(インジョ、朝鮮王朝第16代の王、在位1623-49年、宣祖の孫で元宗の子)の即位まで30年余り東人が政権を握りました。1591年に西人派が失脚すると、東人派は強硬派の李山海を中心とした北人と、穏健派の禹性伝を中心とした南人の2つの派閥に分裂しました。ただ言えることは、朋党というのは、政治的な党派というよりは、学派や地縁血縁といった両班の人間関係全体が構成要素となっているとの事であり、党争は長期化し、朝鮮社会に大きな影響を与えているとの事でもあります。

6. 秀吉による朝鮮侵攻

1589年に対馬を通じて、豊臣秀吉は、朝鮮に対し、日本に服属し、明征討の為の道を貸す様に要求しました。日本の真意をはかりかねた朝鮮は、1590年3月に正使と副使の2人の通信使を日本に送ることにしました。1591年3月に通信使が帰朝すると、西人の正使は、「日本は軍船を用意して戦争の準備をしている」と報告したのに対し、東人の副使の方は正反対の報告で「秀吉は恐れるに足らず」とのことでした。その頃、副使側の東人が朝鮮を掌握していたことと、王自身が戦争を忌避していたことから、副使側

の意見を取り入れて、一切の防衛の準備をしませんでした。

しかし、1592年になり朝鮮の倭館に居た日本人が次々と帰るのを見て、あわてて防衛準備を開始しました。1592年4月13日、豊臣軍は朝鮮半島へ侵攻し（文禄の役）、豊臣軍は開戦半月で首都漢城を攻略し、数ヶ月で朝鮮の威鏡道北辺まで進出しました。明の援軍が進出すると、豊臣軍は、和議交渉のため、朝鮮南部の沿岸まで一旦兵を引き上げました。和議は失敗に終わり、1597年1月15日、秀吉は再び朝鮮半島へ侵攻しました（慶長の役）。2回目の侵攻では全羅道と忠清道への掃討作戦を行いました。明軍が漢城を放棄しないと見ると、豊臣軍は、越冬と恒久占領の目的をもって、休戦期の3倍ほどの地域へ布陣を行いました。

翌年（1598年）、日本で指揮を執っていた秀吉の健康が損なわれ、戦闘は消極的になり、1598年8月18日に秀吉はその生涯を閉じたので、豊臣軍は引き上げました。

7年に及ぶ戦乱のため、朝鮮の政治・経済は崩壊状態となり、朝鮮は増収案として「納粟策」を提案しました。これは穀物や金を朝鮮に供出した平民・賤民に恩恵を与える政策であります。即ち、賤民も一定の額を払えば平民になれば、平民も一定の額を払えば両班になれるというものであります。この制度により、朝鮮の身分制度は、大きく流動化し、その構成比は大幅に変化しました。

この戦争により明は多大な出費を余儀なくされ、女真族の勢力伸張をもたらし、明滅亡の遠因となり、1644年李自成が北京を陥れ、毅宗は自殺して明は滅亡しました。明に代って中国を統一したのは、満州政権の清であります。

7. 光海君（クァンヘグン、朝鮮王朝第15代の王、在位1608～23年、宣祖の第2子）

秀吉との戦争終結後、特に問題となったのは、宣祖の跡継ぎの問題でありました。長男の臨海君は世子にふさわしくないという理由で排除され、光海君を世子とすることを決めましたが、1594年に明が世子冊封（古く、中国で、爵位や皇后などを冊と呼ばれる任命書によって任命したこと）を拒否したため世子問題は宙に浮いていました。1606年、正紀が永昌大君を産みました。しかし、1608年、宣祖が亡くなったため、光海君が王位につきました。

しかし、党争の弊が激しく、大北派の鄭仁浩らの策謀にのり、兄臨海君、弟永昌大君を謀反の罪で殺害し、義母仁穆王后を幽閉するなどの行為をおかし、政治もこれによって紊乱しました。

光海君は、民衆や大北以外の西人などの恨みを買って、1623年2月12日、光海君は自身の甥にあたる綾陽君と西人から宮廷を追放され廃位となりました。第16代は、綾陽君が仁祖（インジョ）として即位しました（在位1623～49年）。

8. 清への服属

仁祖（インジョ）（第16代）と西人派はクーデターの後、大北派の肅正を行い、北人の勢力は小北派の一部を除いてほぼ消滅しました。そして西人と主南人を副とする党派体制を確立します。しかし仁祖即位直後の1624年、論功行賞に不満をもった李适（イ・グアル）が平安道で反乱を起こし（李

适の乱)、仁祖は一時漢城を脱出して公州に逃れました。反乱軍の一部は後金に逃げ込み、仁祖即位の不当を訴えました。後金の太宗は光海君のための報復を口実に、1627年、3万の兵力で朝鮮に侵入しました(丁卯故乱(ていほうこらん))。既に後金と戦う余力のない朝鮮側は、講和を呑むことになり、後金を兄、朝鮮を弟とする条件をのんで、以後一切朝鮮は後金に敵対しないとして講和しました(丁卯約条)。

9. 丙子の乱

1636年、後金は清と国号を変更し、朝鮮に対して清への服従と朝貢、及び明へ派遣する兵3万を要求してきました。この要求を拒むと、清は太宗(ホンタイジ)自ら12万の兵力を率いて再度朝鮮に侵入してきました(丙子胡乱)。朝鮮側は南漢山城に籠城したものの、45日で降伏し、清軍との間で和議が行われました。

今日、ソウル市松坡洞(ソンバトン)に、「三田渡碑」(サムジョンドヒ)という高さ5メートル70センチ、幅1メートル40センチの石碑が立っています。この碑は「丙子胡乱」をめぐる清の太宗の頌徳碑で、名称を「太清皇帝功德碑」(デジョンファゼコンド)と言われ、表面の左側にはモンゴル語、右側には満語が刻まれ、裏面には漢文が用いられています。清に対する服属関係は、日清戦争の下関条約が締結され、朝鮮が大清皇帝を中心とした冊封体制から離脱する1895年まで続くこととなります。

10. 礼論(服喪期間)に関する対立

第18代顕宗(ヒョンジョン、在位1659年-74年)の時代に入ると、社会的には平穏な時代が続きましたが、西人と南人により礼論と呼ばれる朝廷儀礼に関する論争を原因として政局が混乱し、服喪期間に関する論争で西人派が勝利し、南人派(旧東人の分派)は勢力を殺がれました(己亥礼訟)。顕宗は終りのない論争に終止符を打つため、1666年に服喪期間に関する取り決めを行い、これ以上論争を起こした場合は、厳罰にすると取り決めをしました。しかし、1674年に孝宗紀の仁宣王后が亡くなると、再び服喪期間の論争が起り、今度は南人派が朝廷を掌握し、西人派が失脚することになりました。

11. 肅宗による換局政治

第19代肅宗(スクチョン、在位1674年-1720年)の時代に入ると党派政争はさらに激しくなり、肅宗は礼論を逆手に取って、わざわざ政権交代を繰り返す換局を行いました。1680年には西人派に、1689年には南人派に、1694年には再度西人派に権力が移るといふ具合でした。その後、西人派は老論と少論に分裂しました。1720年に肅宗が亡くなり再び党争は激化しました。政権を奪った少論派は1721年から1722年にかけて老論派の肅清を行いました(辛壬士禍)。

12. 英祖(ヨンジョ)による蕩平策

第20代景宗(キョンジョン、在位1720年-24年)は短命で亡くなり、次の第21代英祖(ヨンジョ、在位1724年-76年)は即位当初から臣下間の党争の調停に心をくだき、蕩平策とよばれる各派閥から人材を登用する政策をとり、臣下との調和に努めました。

英祖の治世期間は、52年間と非常に長く、次代の正祖(チョンジョ、在位1776年-1800年)の時代に入ると新たな局面を迎えました。

正祖は、幼くして父の莊献世子が祖父の英祖に櫃（ひつ）の中に閉じこめられて死ぬという事件（1762年）を目撃し、以後の時派（世子に同情）と、僻派（世子を非難）の対立を実見したため、終生、外戚や党派の争いをなくして、実力によって人材を登用するという基本的には英祖の蕩平政治を継承しました。

1 3. キリシト教カトリックの伝来と弾圧

1784年、中国を経由してカトリックが流入してきました。1791年に最初のカトリック弾圧事件（辛亥邪獄）が起きました。

この時代は、英祖の50年以上にわたる文化政治と清からの西洋文明の流入もあって文化的発展を見た時代でもありました。

1800年、第23代純祖（スンジョ、在位1800年－34年）は、10才で即位したため、英祖の継妃であった貞純正后が代わりに執政を行いました。貞純正后は蕩平政治を完全にやめ、僻派の利権を優先する政策を採りました。純祖の34年にわたる治世は、邪獄とよばれたカトリックに対する弾圧がたびたび行われました。

1 4. 金祖淳（キムチョスン）、安東金（アンドンキム）氏の勢道政治

1802年、金祖淳の娘が王紀純元王后になり、1804年、14才になった第23代純祖（スンジョ、在位1800年－34年）の親政が始まりました。1805年貞純王后が亡くなると、金祖淳は王の外戚として政治の補佐を行うようになり、貞純王后により登用された僻派の要人を大量に追放し、自分の本貫（朝鮮において氏族の始祖とされる人物の出身地ないし居住地）である安東金氏の一族より大量に人材を登用しました。このことで士林派による政治は終焉を迎え、金祖淳を筆頭にした安東金氏による勢道政治の時代が始まりました。

王妃一族による権力の独占と腐敗のもとで、三政（田税、軍役、運搬）などによる民衆からの収奪を強めていきました。その矛盾は1811年に洪景来（ホンギョンス）の指導する平安道の大農民反乱となって爆発しました。洪景来の乱は、農民だけでなく、西北地方への地域差別に対する反発や没落両班、新興地主などを巻き込んだ大規模な反乱となりましたが、1812年に鎮圧されました。

安東金氏は次代、わずか7才で即位して22才に崩御した第24代憲宗（ホンジョン、在位1834年－49年）、第25代哲宗（チョルチョン、在位1849年－63年）にも王后を送り込み外戚として権勢を振るいました。実に59年にわたって朝鮮の政治を牛耳っていました。

1 5. 興宣大院君（フンソンデウオングン）政権の成立

本名は李是応（イハウン）と言いますが、1863年に次男の命福が第26代の国王高宗（コジョン、在位1863年－1907年）として即位すると大院君となり、摂政として実権をふるいました。ちなみに大院君とは、王朝において国王に直続の王位継承者がいない場合、王族のほかの系統から次王を選び、その王の実父を尊称するものです。彼が最初に政権を担当した10年間は、国内的には紀綱の弛緩と財政の逼迫、対外的には欧米諸国からの開国の圧力といった、内外ともに厳しい情勢下にありました。そこで彼は国内政策としては、備辺司の廃止、三軍府の復活、書院の撤廃、景福宮の再建、天主教への弾圧、泓布の徴収などを行い対外政策として鎖国攘夷政策を

強化しました。しかし、彼の鎖国攘夷政策は、外国の侵略を撃退するうえでは成果を挙げましたが、朝鮮の近代化を遅らせることになりました。彼は高宗の王妃である閔妃（ミンピ）および一族との対立から1873年に下野しました。大院君は、次に書かれている壬午軍乱（1882年）を利用して、復活しましたが、失敗に終わり清の保定に3年間幽閉されました（1882年－85年）。その後、1895年に政権に関わりましたが、彼の閔氏に反対する立場を利用しようとした日本の意図によるものであって、往年の精彩は見られませんでした。

16. 閔妃一派によるクーデター

1873年、守旧派の反撃を受けて大院君は失脚し、王妃（閔妃）一族を中心とする閔氏政権が登場します。閔氏政権は、1876年、日本の軍事的圧力に屈して不平等条約である日朝修好条規を締結して開国し、以後、朝鮮は日本や欧米の半植民地に転落してゆくことになります。閔氏政権は、1882年の壬午軍乱、1884年の甲申政乱で倒されますが、いずれも清国の支援ですぐに復活し、1894年、日本軍によって倒されるまで、約20年間続きました。

17. 江華島事件

1875年に起きた日本と朝鮮の武力衝突事件で、雲揚号事件ともいいます。1875年9月20日に日本の軍艦雲揚（約250トン）が朝鮮の江華水域に入ったとき、江華島の砲台から攻撃を受けました。翌日、雲揚は同砲台を執復砲撃し、頂山島の砲台を焼き払い、翌々日には永宗島の砲台を砲撃してこれを占領しました。日本側には負傷者2名（のち1名死亡）、朝鮮側は死者35名を出しました。日本は軍艦による武力示威を強化し、朝鮮側の砲撃の責任を問うという口実のもとに、条約締結を企てました。

1876年1月、日本の全権黒田清隆、副全権井上馨は艦船8隻と海兵隊260名を率いて江華島へ至りました。朝鮮側は、江華府において日本全権との交渉にあたりました。日本全権は条約案を提示し、武力示威を背景に調印を迫りました。朝鮮側は、条約案に一部修正のうえで同意をしたので、1876年2月27日に日朝修好条規が調印されました。

18. 壬午軍乱（じんごぐんらん）

1882年（壬午の年）7月に朝鮮の首都、漢城（ソウル）で起きた軍人の暴動のことを言います。1873年に興宣大院君から閔氏に政権が移ると、軍隊の待遇は悪化し、新たに新式軍隊の別技軍が設けられ優遇されました。この結果、旧式の軍人たちの不満が給米の不正受給によって爆発し、暴動となりました。大院君は、この暴動を利用して、閔氏政権の転覆と日本公使館の襲撃を図りました。反乱軍は朝鮮王宮にも乱入しましたが、閔妃は王宮を脱出しました。反乱軍は閔氏政権を倒し、興宣大院君を担ぎ出して大院君政権が再び復活しました。

日本は軍艦4隻と千数百の兵士を派遣し、清国もまた朝鮮の宗主として軍艦3隻と兵3,000人を派遣しました。反乱軍鎮圧に成功した清は、大君主を拉致して中国の天津に連行し、閔氏政権を復活させました。この乱により、朝鮮は清国に対し、いっそうの従属度を強める一方、朝鮮における親日勢力は大きく後退しました。

19. 甲申政変（こうしんせいへん）

1884年12月4日に朝鮮で起こった独立党（急進開化派）によるクーデターのことを言います。守旧派である親清派勢力（事大党）の一掃を図り、日本の援助で王宮を占領し新政権を樹立しましたが、清国軍の介入によって3日で失敗しました。

1884年12月4日、金玉均（キムオツキュン）、洪英植（ホンヨンシク）、朴泳孝（パクヨンヒョ）らは、士官学生や壮士を指揮して国王高宗と王妃の閔妃を守旧派から隔離させ、日本軍の出動を求めて護衛しました。5日には開化派を軸とする新政府をつくり、6日には新しい政綱を発表しました。しかし、袁世凱が1500名の清軍を率いて武力介入すると日本軍は引き揚げ、開化派は孤立無援となり、金玉均ら9名が日本、アメリカに亡命したほか、殺害または処刑されました。

20. 巨文島（コサイとう）事件

朝露秘密協定の動きが起きると、1885年3月、イギリス東洋艦隊はロシア極東艦隊の通路を遮断するため、全羅道南方海上にある巨文島（ポート・ハミルトンの別称があります）を占領し、占領を継続しました。翌86年にはロシアが永興湾（咸鏡道）を占領すると声明を発表しました。清の李鴻章は英露両国を調停して、両国とも朝鮮領土を占領しないとの妥協を成立させました。1887年2月、イギリス艦隊はようやく巨文島を撤退しました。

21. 東学党の乱

東学というのは、朝鮮王朝末期に起った民衆宗教で、慶州出身の崔濟愚（チェジェウ）が、1860年、民間信仰を基礎に儒教、仏教、道教を取り入れた独自の宗教です。東学とは西学（キリスト教）に対決する東方すなわち朝鮮の学を意味します。宗教の次元であれ、平等と理想社会の到来を説く東学は、悪政・貧困・疾病に苦しむ人々を惹きつけました。

1892年12月と1893年2月にも多少の乱がありましたが、1894年4月全羅道古阜郡で東学党の反乱が起きました。農民軍の勢いが急速に盛んになっていく状況下で、閔泳駿は袁世凱と秘密裏に協議し、清軍の出兵を求め、高宗もこれを受け入れました。

清軍の動きを早くから探知していた日本政府は、6月2日に公使館と居留民の保護を名目にして混成一個旅団という大規模な兵力の朝鮮出兵を閣議決定しました。清日両国軍出兵の報に接すると、東学党は撤退しました。

22. 甲午改革（こうごかいかく）

1894年（甲午の年）から翌年にかけて行われた朝鮮の政治改革のことを言います。

もともと日本政府は江華島条約（日朝修好条規）で朝鮮の独立を世界で一番早く認めていました。しかし、朝鮮の宗主国である清朝政府によって干渉、妨害されて改革は進んでいませんでした。

日清戦争が起き日本が清を破ったので高宗は、開化派の主張を受け入れ、日本の明治維新の経験（身分制度撤廃、人材登用、司法制度等）から学び、それまで清朝政府に半強制されていた律令制度文化（奴婢、白丁などの賤民制度）等の悪弊、即ち中華思想の悪弊から脱却せんとしたものでした。

官制の改革による宮中事務と国政事務の分離、科挙の廃止、租税の金融化、通貨の改革、身分差別の撤廃、縁座制・拷問の廃止など多岐にわたるも

のでした。多くは開化派の年来の構想にもとづくものでありましたが、日本の軍事力を背景とした上からの改革という性格は免れがたく、死文化したのも少なくありませんでした。特に三国干渉ののち日本勢力が後退して7月初旬に朴泳孝が追放されると、改革は頓挫を余儀なくされました。

23. 日清戦争（1894～95年）

朝鮮の支配をめぐる日本と清国の間で戦われた戦争で、明治維新以後、朝鮮に勢力の拡大をはかっていた日本と、朝鮮に宗主権を主張していた清国とは、1880年代から朝鮮を舞台に対立を激化させていました。1885年日清間に天津条約が結ばれ、朝鮮に事あるさいの派兵には互いに知らせることが決められました。

1894年南朝鮮に東学党の反乱が起り、5月末全州が彼らの手に帰すると、朝鮮は清の応援を求め、清は兵3000人を出してきました。日本は抗議を申し入れ軍隊を送りました。反乱は、その間いったん治まりましたが、日本政府は撤兵を拒否して、日本は朝鮮の内政改革の要をときました。

日本政府は7月中旬、日英通商航海条約の調印に成功し、イギリスの対日好意を確認出来ました。日本軍は7月23日、朝鮮の王宮を占領し、25日に豊島沖、29日には成歆で清国軍を攻撃し、8月1日、日本は清国に宣戦布告をしました。その後日本軍は平壤および黄海の海戦で勝利し、さらに遼東半島、山東半島を攻撃、旅順、威海衛などを占領しました。翌95年になって清国は講和を求め、李鴻章が全権として下関に来て、4月17日、日清講和条約（下関条約）が調印されました。内容としては朝鮮国の完全無欠なる独立自主の国であることの確認、遼東・台湾・澎湖島割譲、償金2億両、沙市・重慶・蘇州・杭州の開港、通商航海・陸路交通・貿易条約締結その他が取り決められました。しかし、三国干渉によって、遼東を還付しました。

24. 閔妃虐殺事件

1895年、日本公使三浦梧楼（予備役陸軍中将）の指揮のもとに日本軍人・大陸浪人らが、10月8日早朝、景福宮を襲撃し、宮殿に乱入して、閔妃を斬殺しました。三浦は朝鮮軍隊の内紛を装いましたが、王宮の内部にいた外国人の目撃などから国際的な非難をあげました。日本政府は、三浦以下48名を召喚して裁判を行いました。証拠不十分ということで全員を免訴・釈放してしまいました。

25. 朝鮮の清からの独立

1894年日清戦争に日本軍が勝利すると、1895年4月17日の下関条約によって朝鮮と清国の冊封関係は終わり、朝鮮は清国への服属関係を廃棄し、独立国となりました。しかし、その後、朝鮮は宗主国をロシアに変える動きを見せました。

26. 第26代高宗のロシア領事館への退避

閔妃（ミンビ、びんひ）（第26代高宗の妃、第27代純宗の母）が、1895年10月惨殺されると、自分の后が暗殺された高宗は、1896年ロシア領事館へ退避しました。1年後、高宗は王宮へ戻りますが、これは国としての自主性を放棄する行為であり、これにより王権は大きく失墜しました。これは日本とロシアの勢力争いを朝鮮に持ち込む結果となりました。

第2. 大韓民国（1897年－1910年）

1. 大韓帝国の成立

1897年2月、一年ぶりに高宗がロシア公使館を出て、慶運宮（後の徳寿宮）に移りました。高宗は、王権弱化につながった甲午改革での政治制度改革をもとに戻し、王権を再強化しました。1897年8月、まず年号を光武と改め、さらに10月、皇帝即位式を挙行し、国号を大韓帝国と改めました。

2. 日露戦争

(1) 朝鮮の独占的支配を長年にわたり目指して来た日本は、ロシアの満州南部への進出に脅威を感じ、1902年、日英同盟を結び、ロシアとの戦争に備えてきました。1903年夏からの日露交渉も難航し、ついに1904年2月8日、仁川・旅順のロシア艦隊を日本軍が奇襲し、日露戦争が始まりました。

(2) 朝鮮政府は、戦時局外中立を声明しましたが、日本はこれを無視し、開戦直後の2月23日には、日韓議定書を押付け、日本軍の自由な行動を認めさせました。

3. 日韓協約

日本が大韓帝国を植民地として併合する以前に、大韓帝国として締結した条約のことを言い、同じ名称の条約が3つあり、第1次（1904年8月22日）、第2次（1905年11月17日）、第3次（1907年7月24日）として区別しています。

(1) 1904年8月22日付第1次日韓協約調印後の顧問政治

日本政府はその推薦する日本人を財務顧問に傭聘させる事を承認させ日本の大蔵省主税局長目賀田（めがた）種太郎が財政顧問となりました。外務顧問は、日本外務省の顧問であったアメリカ人スティーヴンスが外務顧問に傭聘されました。1905年2月には、日本の警視庁第1部長の丸山重俊が警務顧問に傭聘されました。

(2) 1905年11月17日付第2次日韓協約

日韓保護条約または乙巳（いっし）保護条約とも言います。この条約によって韓国は日本の保護国とされ、国際社会における独立国としての地位を失いました。韓国を保護国とするためには、諸外国の承認が必要なため1905年7月の桂＝タフト協定、8月の第2次日英同盟で、それぞれ米国のフィリピン支配、イギリスのインド支配を承認することと引きかえに日本の朝鮮支配を承認させました。9月には、日露戦争の結果としてロシアとの間に日露講和条約（ポーツマス条約）がアメリカの仲介で締結され、帝国主義列強に日本の大韓帝国に対する保護権確立の承認を取り付けました。

条約調印の報が発せられると、侍従武官長閔泳煥（ミンヨンファン）らは抗議の自決をし、ソウル商人たちは店を閉めて条約の無効を主張しました。また各地で反日の武装闘争が始まり、第2次反日義兵闘争が始まりました。

(3) 日本はさらに1907年に第3次日韓協約を強要し、朝鮮の軍隊を解散させて、朝鮮の植民地化を急ぎました。

4. 韓国統監府の設置

第2次日韓協定により、漢城に日本政府の代表者として統監を置くことになりました。1906年2月韓国統監府が開設され、3月に初代統監とし

て伊藤博文が赴任しました。統監の地位と権限は内政外交にわたる強大なものでした。早い話、統監は天皇に直属していました。

5. ハーグ密使事件

1907年6月、オランダのハーグで第2回万国平和会議が開かれました。この事を知った朝鮮国王第26代高宗は、国際会議の場で、朝鮮が日本の支配下におかれている窮状を訴え、日韓保護条約（1905年）が無効であることを、列国に承認してもらう事を計画し、3名の代表をハーグへ派遣しました。しかし、朝鮮は「外交権」を失っているとの理由で受け入れられませんでした。代表の1名は、抗議の自決をしました。日本政府はこの密使派遣を不法行為として高宗を詰問、退位させ、同年7月朝鮮の内政全般を日本の監視に置くため第3次日韓協約を押しつけ、韓国軍を解散させ、高宗を退位させました。高宗を継いだのが、第27代純宗です（在位1906年—1910年）。

6. 伊藤博文に対する暗殺

1909年10月26日、韓国統監府初代統監伊藤博文がハルビン駅にて安重根（アン・ジュングン）に暗殺されました。1906年に日本は韓国統監府を置き伊藤博文が初代統監となったのですが、彼は韓国併合には反対でした。理由は、①韓国進出の口実として用いてきた「韓国の独立富強」という建前を捨てることは却って益がないこと、②財政支出の増大を招くことから併合は勧められないとしてきました。

しかし、伊藤博文の暗殺後、韓日合邦を要求する声明書が朝鮮人によって出されるなど併合派が優勢となりました。

7. 韓国併合

1910年8月22日の「韓国併合に関する条約」及び同29日の「韓国併合に関する宣言」によって、大韓帝国は日本の植民地にされました。「併合条約」は全文8カ条からなり、韓国の統治権を韓国国王が日本天皇に譲与し（1条）、それを日本天皇が受諾して併合することを承諾した（2条）と規定しており、作為に満ちた条項になっています。この条約によって、大韓民国は日本の一部となり、1392年から続いてきた朝鮮半島の国家は消滅しました。なお、韓国皇族は日本の皇族に準じる地位（王公族）に封ぜられました。

なお、朝鮮人の民族性を抹殺して収奪する圧政に対し、朝鮮民衆は1919年3月1日を期して始められる朝鮮近代史上最大の反日独立運動に決起して戦うこととなります。

参考文献

1. 新版世界各国史2 朝鮮史
山川出版社発行
2. 朝鮮の歴史 昭和堂発行
3. 世界歴史大系 朝鮮史2—近現代
山川出版社発行
4. ウィキペディア 李子朝鮮
5. 新版韓国朝鮮を知る事典 平凡社発行

以上

2022年4月8日脱稿

今後のスケジュール

【純正律音楽コンサート】

2022年5月21日(土曜日)14時開演

会場：横浜市磯子区民センター「杉田劇場」

出演：水野佐知香(Vn)、三宅美子(Hp)、荒井章乃(Vn)
杉本伸陽(Vla)、植草ひろみ(Vc)

【癒しの音楽コンサート】

2022年9月3日(土曜日)14時開演

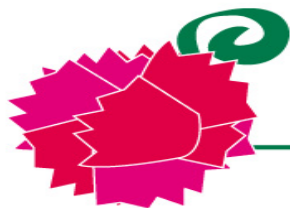
会場：飯島藤十郎社主記念「LLC ホール」

出演：水野佐知香(Vn)、三宅美子(Hp)
吉原佐知子(箏)、崎元譲(ハーモニカ)

【クリスマスコンサート 2022】

2022年12月25日(日曜日)14時開演

会場：横浜市磯子区民センター「杉田劇場」



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp <http://just-int.com/>

2022年5月10日 発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫

*純正律音楽研究会 YouTube チャンネルを開設しました。

コンサートや CD 紹介の映像が当会ホームページからご覧いただけます。

<http://just-int.com/>